

# 佳作

## 『注目すべき 125 通の手紙 : その時代に生きた人々の記憶』

ショーン・アッシャー編 北川玲訳

文学部 文学科 1 年 諸井美優

ある男が机に向かって彼女を初デートに誘う手紙をしたためている。男は一文字ずつ丁寧に書いていき、日時と場所を最後の一行に添えた。緊張から汗がにじんでいる手で封筒を取り出し、書き終えた便箋を中に入れて封をする。そして宛名を書いて切手を貼ると、男は手紙だけを持って家を飛び出した。——手紙で連絡を取り合い、会う約束まで決める。今では考えられないような話だが、これはほんの数十年前の日常的な光景である。しかし電子メールや SNS で気軽にやり取りできる今日、わざわざ手紙を書こうという人は少なくなっている。たしかに即座にメッセージを送りあうことができるのは便利だ。けれどそこに表示されるのは無味乾燥な電子文字であり、残るのは電子データのみである。

現代においては書く機会が減っている手紙。この本を編纂したショーン・アッシャーが目指したのは『手紙博物館』だ。大きな本のページをめくるとそこには実物の手紙の写真と手紙の内容が載っており、それに解説までついている。まるで博物館の中で展示品を見てまわっているような気分させてくれるのだ。そして『手紙博物館』に展示されている手紙の中には一風変わった品々も含まれている。時にはココナツの殻がメッセージを運ぶ役割を担うことだってある。第二次世界大戦中、大統領になる前のケネディが SOS を刻み付けたココナツの殻は後に大統領執務室に置かれ、文鎮として大切に使われたそうだ。こうやって説明してもよく伝わらないだろうから、実際に本書の写真を見てほしい。このココナツの写真とそのエピソードを見れば、歴史上の人物であるケネディ大統領が途端に実像をもって読者の前に現れるだろう。『手紙博物館』にはどんな形であれ、たくさんの「手紙」とその想いが詰まっている。

ある女が郵便受けを覗くと一通の手紙が入っていた。女は手紙に書かれた差出人を見るやいなや、その場で封を破る。二つ折りの便箋には精一杯丁寧に書いたのであろう字で文末にこうあった。『待ち合わせは三十一日、十時にハチ公前』。

手紙は電子メールと比べて手間も時間もかかる。それは紛れもない事実だ。しかし手紙は書く人ごとに違う手書きの文字、そして大事にしまっておいたならば読むたびにいつでも当時の気持ちがよみがえってくる素敵なものでもある。時がたてば忘れられてしまうメールは「情報」でしかないが、手紙はいつまでも形が残る「モノ」なのだ。この本を読むと、そんな手紙の魅力を写真と文字で再発見することができる。さて、最後に手紙を書いたのはいつだったのだろうか。もう一度ペンをとって、誰かに手紙を書いてみてはどうだろう。